

『今月の天候と農作業』

通巻第5576号

2月号

平成27年 1月 30日発行

宮 崎 県

宮崎地方気象台



【九州南部1か月予報】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	40	30	30
降水量	九州南部	40	30	30
日照時間	九州南部	30	40	30

【概要】

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

週別の気温は、1週目は、低い確率50%です。2週目は、平年並または低い確率ともに40%です。

<1週目の予報> 1月31日(土)～ 2月6日(金)

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、週間天気予報 (<http://www.jma.go.jp/jp/week/>) を参照してください。

<2週目の予報> 2月7日(土)～ 2月13日(金)

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

<3週目から4週目の予報> 2月14日(土)～ 2月27日(金)

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

普通作物

◆ 早期水稲

1 播種と出芽

十分に浸種し、催芽で芽出した種子を用います。稚苗の場合は催芽粃で180[㍉]程度を播種し、苗立枯病等の防除を兼ねてかん水し、覆土は粃が隠れる程度とします。厚播きは徒長苗になりやすくなるので注意します。

段積みでの出芽は、地面と箱の間に隙間をつくり、積重ねは十段程度とします。平置きの場合は温度が上がりにくいので加温します。温度は28～

30度で、出芽長は床土面から5～10[㍉]で終わります。高温や期間が長くなるとリゾープス菌（クモノスカビ）が発生します。

2 緑化と硬化

寒冷紗等で3日程遮光し、温度は昼間は25度以下、夜間は15度以上を保ちます。本葉1葉目が展開し2葉目が抽出した頃迄です。この時の苗の第一葉鞘高（腰高）を4[㍉]以内とします。

硬化の前半は昼間は20度以下、夜間は10度以上を保ち後半は外気にならします。かん水は床土温度を下げないように午前中に行います。

なお、中苗や成苗では、播種後20日目と30日目頃に液肥を散布し、散布後は軽くかん水して葉焼けを防ぎます。

◆ 麦類

1 穂肥

早いところでは月末には幼穂形成期を迎えます。小麦では2月中旬に10[㍉]当たり窒素成分で2・5[㍉]、加里で2[㍉]程度を施肥します。

2 土入れと排水対策

土入れは肥料の流亡防止、雑草抑制や防寒効果があるので、麦が節間伸長期に入る前までに行います。排水対策はほ場周囲や条間に作溝します。

(鎌田 博人)

施設野菜

◆ 共通事項

中旬までは午前中の温度確保と、内張カーテンの開放による光線確保により光合成を促進します。下旬になると日射量も増え、最低気温も徐々に高まるため、加温機の稼働時間が短くなり、ハウス内湿度の上昇に伴う病害の発生が多くなりますので、夜温の高い日は内張カーテンの調節により、適度に加温機が稼働するようにします。また、収穫までの日数も短くなり、着果量も増えてきますので、追肥とかん水量を増やしていきませんが、1回の量を増やさず、かん水間隔を短くするなど、極端に栽培環境を変えないよう、こまめな管理に心掛けましょう。

◆ きゅうり

ハウス内の温度管理は、午前中28～30度、午後23～25度、夜間12～14度とします。

促成のつる下ろし栽培では、「芯止まり」になりやすいので、開花や収穫果の位置（生長点から3～4節目で開花、10節前後で収穫できるのが理想）に注意します。開花節位が上がった場合には、強めの摘果を行うとともにかん水量を増やして、草勢維持に努めます。

◆ ピーマン

受光態勢をよくするため、下位節の徒長枝を摘除するとともに、中位節以降の側枝も伸びたものは2～3節で摘心し、下位節まで光が当たるようにします。ハウス内の温度は、午前中28度、午後は徐々に温度を下げ、夕方25度、夜間18度とします。

◆ トマト

果実肥大と着色促進及び食味向上のためには、日射量の確保と葉数確保が必要となりますので、日中の内張カーテンの開放と15～18枚程度の葉を確保します。下旬以降は、着色までの日数も徐々に短くなり、着果数も増えてくるため、かん水量を増やして草勢維持に努めます。

◆ いちご

曇天が続くと成熟に要する温度が確保できず、成熟期間が長くなり、裂果等の品質低下が懸念されます。ハウス内の温度は、午前中25～28度、午後20～25度、夜間5～8度とします。

曇天が続き、日中温度が上がらない場合には、着色促進のため夜温をやや高め（8度を上限）に管理します。また、大玉果、食味向上のため8～10果に摘果します。今年はハダニ類が平年に比べ多く発生しています。薬剤が均一に付着するよう、古葉や収穫の終わった果梗の除去はこまめに行い、定期的な薬剤散布を行います。

(黒木正晶)

葉茎根菜類・いも類

◆ トンネル内の適正な温度管理

気温が低い時期なのでトンネル栽培では温度確保に努めますが、晴天日の日中は高温になる日があり、換気の必要な場合があります。レタスやスイートコーン、かんしょ、ニンジン等トンネル栽培については開閉管理を徹底し適温管理に努めましょう。

◆ スイートコーン

大型、小型トンネル栽培のは種適期となります。スイートコーンは発芽と生育の適温域が大きく異なる品目です。発芽適温は30～35度で管理することになります。発芽後は22～30度を目途に換気します。

◆ レタス

生育適温は15～20度です。高温管理は葉がよじれたり変形球になりやすく、寒害を受けやすくなりますので、日中は十分な換気を行ってください。

◆ 食用かんしょ

今月から来月にかけてが、トンネル栽培の挿苗時期となります。育苗ハウスでは採苗前の苗を外気温にもならしながら適温で管理し、徒長を防ぎ、充実した苗に仕上げます。挿苗予定の数日前に採苗した苗（取り置き苗）を用

います。また、挿苗時には十分な地温を確保するため、トンネルは前日より密閉して地温確保（18度以上）に努めます。地温が低かったり、徒長苗の利用など条件が悪いほど活着が遅れ、株当たりのいも数も減りやすくなるので、適正な管理を行い初期生育を促します。

◆ さといも

早生種の定植期になります。連作障害が出やすいので連作は避けます。また、栽培ほ場はセンチュウ消毒を行います。健全な種芋（30～50匁程度）を選別し、センチュウや乾腐病の消毒を行って定植します。

◆ 畦立てマルチについて

これから播種・植付けする品目の発芽・活着促進は、地温と土壌水分を確保することが大切です。マルチングする時はほ場の土を片手で握ってみて団子になる程度を目安とします。逆に手が濡れるようなら過剰ですので適湿になるのをまって耕起します。

（河野 健次郎）

果樹

1 常緑果樹

◆ 完熟きんかん

完熟きんかんの出荷が最盛期を迎えます。今年はず上がりが少なかったため、酸含量が高い果実が見られます。食味を確認しながら収穫しましょう。また、これからは暖かくなり、過熟やウルミ果の発生が懸念されます。昼間は10～15度を保ち、夜間は凍害に遭わないように注意しましょう。

◆ マンゴー

今年は、花芽の発生の遅れや、弱い花芽の発生が見られます。このような年は、結果不良やミニマンゴーの発生が多くなります。摘果の際は、極端な早期摘果を避け、果実の縦径が3匁程度になったのを確認してから行いましょう。

アザミウマ類やカイガラムシの発生に十分注意しましょう。

2 果樹園共通

◆ 土壌改良

果樹栽培において高品質と高収量を得るためには、土壌の通気性の確保が重要です。たい肥や稲ワラなどの有機物を施用し、必要に応じて土を部分的に掘り起こし、有機物を混ぜ合わせることで土壌の通気性の改善を行いましよう。

(山口 和典)

花き

◆ 電照ギク

2～3月出荷の作型は最も暖房コストがかかる作型です。それぞれの品種、系統に適した変温管理でコスト削減に努めてください。低温が続いていますので、低温開花性でない品種は夜温だけでなく昼温の確保にも努めてください。施設の多層被覆によりハウス内の湿度が高まる時間帯が長くなります。換気による除湿や定期的な予防散布などを行い、病害防除に努めてください。除湿機能を持つ被覆資材の導入も効果的です。

「神馬2号」、「神馬66-4」の3～4月出荷作型の再電照開始は総苞りん片形成後期から3～4日間実施します。開始時期の決定は、必ず「花芽分化の検鏡調査」を行った上で決定してください。

◆ スイートピー

昨年秋から12月の天候不順の影響からようやく立ち直り出荷本数が増えます。タイミングを逃さず植物を良く観察し、草勢に応じたかん水及び施肥管理を早めに行ってください。「花シミ」も発生しやすい条件になってきますので、換気に努めるほか、循環扇等でハウス内の空気を動かして水滴の付着を防ぐなど「花シミ」の軽減を図ってください。また、定期的な生物農薬のダクト散布は灰色かび病対策に有効です。

◆ ホオズキ

7月出荷は2月上旬までの植え付け、8月出荷は2月中旬からの植え付けになります。土壌消毒を必ず実施し、ネコブセンチュウや白絹病などほ場に

持ち込まないように、十分に注意して地下茎の選別・調整を行い、必要に応じて地下茎を消毒してください。

◆ デルフィニウム

沿海地域では2番花の収穫期から3番花の萌芽期になります。ボリュームを確保するため、適正な仕立て本数に整枝してください。

◆ トルコギキョウ

特に八重系のブラッシングや成長点の障害が心配されます。適正な温度管理に加え、不要枝、蕾の摘除、カルシウム剤等の葉面散布で発生の軽減を図ってください。灰色かび病による花シミや花粉へのカビ発生対策には生物農薬のダクト散布が有効です。

◆ ラナンキュラス

1月後半から収穫量が増加していますので、草勢が低下しないように150ppm程度の濃度の液肥を定期的に施用してください。日中の温度管理は収量確保のため15度程度を目安にします。

(中村 広)

畜産

今月は「家畜防疫強化月間」です。気温が低下し空気が乾燥すると鳥インフルエンザをはじめ、様々なウイルスや細菌が活発に動くようになります。韓国においては1月28日現在、口蹄疫が68件発生し被害が拡大しています。農場に病気を侵入させないことが大切ですので、車両、人及び物の出入りには注意を払うとともに、消毒槽の設置など日常の衛生管理に努めましょう。

◆ 鳥インフルエンザ対策

2011年の発生以来、12月に本県と山口県、1月に岡山県と佐賀県で相次いで高病原性鳥インフルエンザが発生しました。今後も発生が懸念されることから最大限の注意が必要です。①長靴は鶏舎ごとに履き替える。②防鳥ネットは2センチ以下の網目にし、野鳥や野生動物の侵入を防ぐ。③鶏舎の壁

や穴は補修する。④殺鼠剤や粘着シートを使いネズミを駆除する。⑤鶏舎ファンが止まっている間はファンのブラインドを閉める。

◆ 家畜の飼養管理

幼畜は寒さに弱いので、隙間風が直接あたらないようカーテンやコンパネを設置するなどします。冬場は換気不足になりがちになり、牛舎内にアンモニアガスなどが充満すると、家畜の生産性が急激に落ちる原因にもなります。床をこまめに交換しアンモニアガスの発生を防ぎ、気温の上がる日中に畜舎カーテンを開け、換気扇やファンを回すなどこまめな換気を行いましょう。床が乾燥しすぎると、まいあがった埃や塵を家畜が吸い込み呼吸器疾患を発生しやすくなりますので、細かな霧を噴霧するなど程度の湿度を保つようにすることも重要です。

(須崎 哲也)

特用作物

◆ 茶

1 春肥の施用

春肥は、一番茶をはじめ、二・三番茶の収量品質の向上に大切な肥料で、2月上旬頃から施用します。肥料の種類や散布量は地区の基準に準じ、うね間全面に幅広く散布し、施肥後は根を傷めない程度に軽く攪拌しましょう。

2 春整枝の実施

春整枝の時期は平均気温10度が目安です。平坦地では2月中旬から、山間地では3月上～中旬頃に実施しますが、一番茶の摘採期の集中を避けるため、品種の早晚の他、地域の気象等を考慮し整枝時期を調整してください。その際は、整枝直後に急激な低温に当たらないよう天気予報に注意して実施してください。

整枝の高さは、葉層を8センチ以上確保した上で、最終摘採位置から3～5センチ高い位置としますが、秋整枝を実施した茶園では、一番茶となる芽にかからない高さで丁寧に整枝してください。

また、萌芽15日前からは防霜対策が必要ですので、それまでに、防霜ファンやスプリンクラーの整備・点検も実施します。

3 カンザワハダニの防除

カンザワハダニの防除時期は産卵開始時期の気温10度となる2月下旬～3月上旬頃の春整枝後になります。

地区の暦に準じ、裾部や葉裏へ薬液が十分にかかるように散布してください。

4 チャトゲコナジラミの発生の確認

県内の茶園でもチャトゲコナジラミの発生が確認されました。この害虫は、茶の葉の裏に寄生して越冬しますので、茶の葉の裏を確認し、見慣れない虫を発見した場合には、最寄りの農業改良普及センター等の茶関係機関へ連絡してください。

(佐藤邦彦)

◆ しいたけ

1 植菌と仮伏せ

植菌は、時期が遅れると害菌の付着が多くなりますので、暖地では遅くとも2月下旬までには終わらせましょう。

仮伏せは、植菌した種駒の乾燥を防ぎ初期活着を促進する作業です。菌糸の活着に必要な温度と湿度を保つ必要があります。本県では、地際から40センチ以下の高さに横積みする方法が多く使われています。それぞれほだ木の周囲を笠木や遮光ネット等で風が当たらないように被覆し、保温・保湿を図りましょう。

2 寒子づくり

袋掛けやビニール被覆を行い、良質なしいたけの生産に努めましょう。

3 採取

発生したしいたけは、目標の品柄に応じて若干早めに採取するなど、品質の向上に努めましょう。特にほだ木の表面を傷めないように、かつヒダに触れないよう丁寧に採取しましょう。

採取後は速やかに乾燥し、湿気が入らないようにポリ袋などで密封し、箱に入れて冷暗所で貯蔵しましょう。

4 降灰対策

阿蘇山等の噴火により、しいたけやほだ木等への火山灰の付着が懸念され

ます。降灰のある地域では、ビニール等でほだ木全体を被覆するなどの対策を行ってください。

(小田 三保)

◆ たばこ

今月は、仮植と苗床管理が主な作業となります。苗の良否が本畑以降の生育に大きく影響しますので、健苗育成に努めましょう。

1 苗床肥土は排水・通気性・水もちが良く、病害虫がない良質な肥土を使用しましょう。

仮植は葉数5枚苗（米粒大までの葉数）を使用し、活着までは床面が乾燥しない程度にかん水を行いましょ

う。活着後は、夕方床面が少なく乾く程度にかん水を行い、病害発生や根腐れに注意しましょう。また、苗床が高温多湿にならないよう温度調節を行いましょ

う。本畑移植7～10日前からは、苗の生育に応じて換気とかん水制限をして順化处理を行いましょ

う。2 畦立は練畦防止のため、土壌水分に注意して行いましょ

う。また、根張り促進のための地積確保と排水対策も含めて30％以上の高畦にしましょ

う。3 春消毒や苗床での農薬使用は、使用基準に沿って最善の注意をはらいながら行いましょ

(松元 貴光)

内容の詳細について

2月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県営農支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nogyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

向こう1か月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

農作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
施設野菜類	病害全般	—	多発してからでは防除効果が劣るので、初期防除を徹底します。特にコスト低減のため多重・多層被覆にしているところでは、換気が悪く病害の発生が助長される傾向があるので注意が必要です。 ワタアブラムシでネオニコチノイド系薬剤に対する感受性低下が確認されているので、使用薬剤については地区の普及指導員や技術員の情報を参考にします。
	アブラムシ類	やや多	
冬春きゅうり	べと病 うどんこ病 灰色かび病 褐斑病 つる枯病	並 並 並 やや少 やや多	うどんこ病は乾燥した条件下で、その他の病気は多湿条件下で発生しやすいので、適正な温度・水管理に努めます。また、罹病葉は重要な感染源となるので、適宜除去し園外に持ち出します。 つる枯病は、発病前からの薬剤散布による予防に重点をおきます。
	黄化えそ病 (MYSV) ミナミキイロアザミウマ	前年より少ない、前々年より多い 並	黄化えそ病の発生が見られます。ほ場内を注意して観察し感染株を確認した場合は、速やかに罹病株を抜き取り、ビニール袋等に入れてほ場外に持ち出し完全に枯れるまで密封処理します。 また、黄化えそ病を媒介するミナミキイロアザミウマは、発生初期に防除するとともに、卵と蛹には薬剤がかかりにくいので、最少でも7日間隔で3回の連続した防除を行います。
	病害虫全般 (改植時の留意点)	—	ウイルス病を媒介するコナジラミ類やミナミキイロアザミウマに対しては、前作のきゅうりを抜根する前の防除を徹底するとともに、抜根後は20日間以上蒸し込みます。
冬春ピーマン	斑点病 うどんこ病	並 並	斑点病は多湿条件で発生しやすいので、ハウス内の適正な温湿度管理、排水対策等を徹底します。 いずれの病害も、罹病葉等は重要な感染源となるので、適宜除去し園外に持ち出します。
	ミナミキイロアザミウマ ヒラズハアザミウマ カバコナジラミ類	並 やや多 やや多	今後暖かくなるにつれて増加する恐れがありますので、発生が多いところでは最少でも7日間隔で3回の連続的な薬剤散布を行い、防除を徹底します。
冬春トマト	葉かび病 すすかび病 灰色かび病 疫病	やや少 前年・前々年より多い やや少 やや多	いずれの病害も多湿条件で発生しやすいので、施設内が多湿にならないようハウスの換気に努め、曇雨天が続く時は日中でも暖房機の送風を稼働させるなど除湿に努めます。 薬剤耐性菌の出現を回避するため、同一系統薬剤の連用は避けます。
	カバコナジラミ類 トマト黄化葉巻 病 (TYLCV)	並 並	ウイルスを媒介するタバココナジラミ類の発生は平年並の状況ですが、施設内には黄色粘着トラップ等を設置し、媒介虫の早期発見・防除を徹底します。また発病株は根ごと抜き取り、適切に処理します。
冬春いちご	うどんこ病※ 炭疽病	並 並	うどんこ病は、多発すると防除効果が低くなるので予防に重点をおき、発病後は散布間隔を短くする等発生初期の防除を徹底します。 炭疽病を確認したときには、直ちに根ごと抜き取り適切に処理します。
	ハダニ類 ※ オンシツコナジラミ	やや多 前年・前々年と同程度	ハダニ類の発生が多く注意報を発表しており、年明け後も引き続き多発傾向にあります。ハダニ類は、寄生数が増加してからの防除は難しくなるので、低密度時に防除を徹底します。また、複数の殺ダニ剤に抵抗性をもつ個体群が確認されているので、物理的に窒息死させる気門封鎖剤を防除体系に組み込みます。 オンシツコナジラミについても、薬剤感受性の低い個体群が確認されていますので、使用薬剤については地区の普及指導員や技術員の情報を参考にします。

- 1) ※は注意報を発表しています。
- 2) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるかを予測したものです。
- 3) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、<http://www.jppn.ne.jp/miyazaki> です。
- 4) 短期暴露評価の導入により、農薬の使用方法が変更になるものがありますので注意して下さい。